



田中 浩一郎
慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科 教授

私から見た中東協力センター

創設 50 周年おめでとうございます。

1990年代の前半、私が勤務していた財団法人の主管が中東協力センターと同じ通商産業省（当時）であり、JCCME とは互いに至近距離にあったことで交流が始まって以来、30年余を数えるに至りました。その後は一時的に理事として、また、最近は外部委員として微力ながらセンターのお手伝いをさせていただいていることを嬉しく思います。

バブルが弾けたあの当時、中立地帯で操業するアラビア石油の利権延長交渉が政官民にとって大きな課題となっていました。その中であって中東協力センターは「日の丸原油」を絶やさないためにも日本企業によるサウジアラビアへの投資促進を意識した活動を展開していたという記憶が鮮明にあります。かくいう私もこうした調査研究事業の一部にかかわりましたが、結局、契約が失効した時には残念でなりませんでした。

側面からの支援は上手く行きませんでした。サウジアラビア総合投資庁ジャパンデスクへの要員派遣に始まる、同国やその他の中東諸国への企業進出を支援する枠組みを JCCME が作り出してきたことは先駆的な活動であったと考えています。個人的には自分のフィールドであるイランの首都テヘランにハータミ政権（当時）の開放政策に乗じて同様の出先機関が開設された時には感慨深いものがありました。

いまでもセンターにとって中東協力現地会議の開催がもっとも華やかなイベントであることを今夏に再確認しました。数多くの日系企業から参加者が開催地に集う様子は壮観でしたし、中東地域でのビジネスにまつわる議論が交わされることはコロナ禍を経ても変わっておらず、安心しました。その一方で、かつてのサウジアラビア国家産業クラスター開発計画や現在の日・サウジ・ビジョン2030への関与のように、国家プロジェクトへの協力体制構築にかかわる事業に派手さはないかもしれませんが、日本と中東をつなぐ大事な架け橋になっていると感じています。粛々と続けられている相手国からの研修員の受入事業も然りです。この他にも中東諸国を視察する研修プログラムなどが思い出されます。配下の若手研究員を参加させてもらったことが何回かありますが、これも有益な事業だと認識しています。

最後になりますが、私にとって中東協力センターに関してもっとも強く残っているイメージを頭の中で思い描いてみました。それは 2000 年代に使用していた九段北の事務所に至るまでに登らなければならない坂道（中坂）です。

